イタリアでは技術者が誇りを持っている。双方の良い所をどう結びつけるかが今後の課題だ。それには、もう一度原点に戻って、テキスタイルを創作する人達自身が声を大にして、良い物とは何かを問うべきである。又、良い物を作らないと産地が崩壊していく。それを救うには、業界が危機感を共有、自覚し、今まで分断されていた情報もお互いに産地と結びつけることが重要だ。テキスタイルデザイナーのステイタスの向上もまた必要だ。ファッションデザイナーのように名前を出すなどのサクセスストーリーを仕掛けたらどうか。つまりアパレルデザイナーと同様に横並びにするべきである。勿論、テキスタイルデザインももっと勉強するべきだ。デザイナーの分業、細分化が進んだせいか絵描き的デザイナーが多いようで、物創りの技術等を知らなさ過ぎると思う。イタリアのデザイナーのように全てに精通して広く活躍してもらうためにも、T.D.Aの協力、活動を期待したい。

一方、まもりも大切で、特に知的所有権の問題を明確にする必要性がある。インターネットで発表するなど話題を作ったり、真似をする企業をデザイナーとして、訴える等、常にステイタス確保のための努力が必要だと思う。

久田｜ファッション界においても同様の問題が山積みしている。例えば、ファッションショーをやりたいが、お金の無い若い感性の豊かな人が沢山いる。テキスタイルもファッションも、感性を豊かに表現、具体化できる環境や状況を作る必要がある。

又、一方、現在イタリアのグッチ、プラダ等のブランドには質の良いプロデューサーが存在していて、例えばプラダでは、デザイナーがいなくても生産体制で良い物を作る姿勢がある。つまり、プロデューサーが活躍する時代でもある。しかし、いずれまた、DCブランドの時代が戻るのではないだろうか。

三島｜60年代以降、現在までを振り返り、どこに問題があったかを探ることも大事である。今はどのような時期にあるか、今後はどうかなど、何もはっきりわかっていないのが現状だ。今までは愚劣なプロデューサーの時代だったとも言える。アルマーニなど、80年代は何だったのか。デジタル化が進むので、2002年までには触覚的情報をインプットさせたり、先は明るいと、私は思う。

森山｜アパレル会社やテキスタイルのコンバーター、そして産地がもっと情報を供給しあい、共有するべきだ。

ワールドのアパレルデザイナーはヨーロッパのテキスタイルを見ると意欲が湧くが、日本のテキスタイルを見ても、データばかり多くて意欲が出ないと言う。言い換えれば、日本はテクノロジーは進んでいるが、思想に問題がある。ヨーロッパを追いかけるのではなく、日本、及びアジアのクリエーションは何かをしっかりとふまえた方が良い。気候、風土、文化を考慮して掘り下げてほしい。そして、デザイナーと産地とのコミュニケーションを深くすることにより、良い物が作られると思う。

三島｜テキスタイルは、アパレルだけではなく、テキスタイルとして様々な用途、分野のマーケットを持って育てている。アパレルおごるなかれで、テキスタイルは胸を張って、幅広く新しいジャンルを切り拓いていこう。

森山｜産業資材としてのテキスタイルの分野、デザインの時代に入りつつあるのではないか。

わたなべ｜人類の歴史と共に、人間の生活に密接に関わってきたテキスタイルの分野で、21世紀に向けてどのような物作りをするか。人間の生き様、文化を見つめ直し、次の時代へいかに結びつけるか。T.D.Aに課せられた使命を考えるに当たっても、本日は貴重な御意見をいただき有難うございました。

リポート［古屋興一］